2024年4月発行

関東学院大学　キリスト教と文化研究所

ニュースレター News Letter

No.54

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

時代的転換期における研究所の存在意味

学院長　松田　和憲
Kazunori Matsuda

皆様のもとに、「ニュースレターNo.54」をお送りできますこと、嬉しく思います。

研究所発足の時期に、本研究所の名称を「キリスト教文化研究所」とするか、あるいは「キリスト教と文化研究所」とするか、この「と」を入れるか入れないかを巡って議論を重ねた末に現行の名称に辿り着いたことを想起し、改めてその意義深さを再認識させられています。過去20年余りの間に、世界の情勢が大きく変化し、価値観が著しく多様化する中で、キリスト教の世界観、人間観が多文化、他宗教といかに対峙し、拠って立つ基軸を見据えながら、尚且つ、多種多様な異文化の中で、それらと対話を重ねつつ自らのアイデンティティーをどう確立するか、と言った命題を考慮するならば、時宜に適った命名であったと思っています。

聖書の思想、キリスト教的なものの考え方に依拠する人格の陶冶を教育理念とする当大学にとって、当研究所と、一昨年4月に開講した「キリスト教人間学インスティテュート（Institute for Christian Human Studies）」は今後、本大学におけるキリスト教教育の二本柱として相互補完的な関係を構築することが求められていると言えましょう。しかしながら、担い手が多忙で担うべき任務の煩雑さを考えるとき、有機的関係を模索することは容易なことでないとは言え、少なくとも両者に関わる人々がこの必要性を念頭に置くべきだと考えます。そうした問題意識のもと、何らかの形で、意見交換、デスカッションの機会が与えられることを願っています。当研究所もICHも、重要な役割を担う部署でありながら、派手さもなく、またすぐに学生たちが飛びつくようなテーマを開示することは難しいと思いますが、関心を持つ学生たちが起こされ、豊かな思想、ものの考え方・捉え方の深みに導かれることを心から望んでいます。

最後に、大学におけるキリスト教教育の一環として、喫緊かつ不可避な課題として二つ、宗教問題、平和問題について、私見を述べて終わりたいと思います。まず、宗教問題ですが、安倍元総理の死去に伴い、統一教会との関係性が取り沙汰されて、「宗教」を一括りで論じる傾向が目に付くようになりました。世界の動向を考慮するとき、正しい意味での宗教理解を学生たちに伝える必要性を感じます。もう一点、世界の様々な局面で戦争、紛争が絶えない状況下で、平和問題について真剣に論じ、考える必要性を痛感しています。現実的に言えば、利己主義に対する「利他主義」の必要性が叫ばれていますが、その根拠となる人間理解が乏しいように思います。安価なヒューマニズムに堕するのではなく、まことの「平和を創出する」根拠を明確にしなければならないと考えます。このような課題に対しても、当研究所がコミットできるよう願っております。研究所の今後の働きに期待してペンを置きます。

「バプテストの日本宣教150周年」を迎えて

内藤幹子（経営学部）
Mikiko Naito

2023年は、「バプテストの日本宣教150周年」に当たる記念の年となりました。当研究所は、日本における「バプテスト研究」の一翼を担い続けてきた団体です。近年では基本的に「年に1冊」のペースで『バプテストの歴史と思想研究』と題したバプテスト研究論文集を出版してきました。2024年3月刊行予定の第7号では、本学専任教員による研究論文に加え、特別企画として当研究所「バプテスト研究グループ」に参加してくださっている学外の研究者の皆様より、ご自身における「バプテスト研究の歩み」に関する文章をお寄せ頂きました。それぞれに研究を志したきっかけ、研究に対する誠実な思いのあることを改めて具体的に知ることのできる文章です。是非、とりわけバプテスト教会はじめ関連・協力団体に連なる方々にお読み頂き、現在このような「バプテスト研究」が日本においてなされ、このような分野を専門とする研究者が存在するということを知って頂ければ幸いです。

我々の先を歩まれた日本のバプテスト研究者のご尽力により、我々は日本語で読むことのできるバプテスト関連の著作や各種資料を手にすることができます。個人的な印象としては、「イギリスやアメリカを背景とする研究、日本のバプテストに関する研究が盛ん」という傾向があるかも知れません。もちろん、そこに重要なテーマがあるからこそ、そのような状況が続いているのでしょう。一方、それ以外の地域のバプテスト神学や歴史に関する研究は、日本において着手困難であるという状況が続いています。筆者自身、ドイツのバプテストに関心を持ち、研究課題としていた時期がありましたが、必要な資料にたどり着くのに苦労があり、その道筋を上手に見出すことが叶いませんでした。しかしインターネットの普及をはじめとした環境の激変により、我々研究者は以前では考えられないほど容易に、世界中の様々な資料にアクセスできるようになっています。それらの利点を相応しく使いこなし、今まで紹介されてこなかった分野のバプテスト研究が続々と日本に登場する時も近いのではないでしょうか。

日本におけるバプテスト宣教の歴史について言えば、各団体から近年発行された記念誌や資料集は、先行研究の成果を豊かに取り入れたものとなっています。例えば、日本バプテスト同盟は2013年に『日本バプテスト同盟に至る日本バプテスト史年表1860−2005』（「資料編」は2014年）を、日本バプテスト連盟は2018年に『日本バプテスト連盟七十年史』を発行しました。これらの貴重な労作に表わされた日本におけるバプテスト宣教の歴史に学びつつ、我々はその先に続く歴史を適切に記していくため、十分な準備と研究を継続しなければなりません。

筆者は現在、熊野清樹（1890−1971）という人物を通して日本のバプテストについて知りたいと願い、資料の収集・整理と論文の執筆を続けています。熊野の遺した写真の多くには、撮影年月日や場所、人物名が裏面に丁寧に記されています。ただ、中にはそうではないものもありました。ここに紹介した写真には、裏面に「関東学院」としか記されていないのです。このような手つかずの資料をコツコツと読み解いていく中で、小さくても新しい発見が与えられることを期待しつつ、今後も微力ながら日本におけるバプテスト宣教の歴史研究に携わっていきたいと願います。

写真：日本バプテスト・キリスト教目白ヶ丘教会所蔵
（熊野は前から３列目・右から２番目）

所員紹介

草山 学（国際文化学部英語文化学科）
Manabu Kusayama

私の専門は、英語学（英語の言語学）ですが、英語にそもそも言語学的な興味を持ち始めたきっかけは、高校時代に宣教師として来日していたアメリカ人の先生との「ヨハネによる福音書」の英語聖書輪読会でした。この福音書は有名な「はじめにことばありき（In the beginning was the word）」で始まりますが、私は、単に英語を勉強したいとの思いでその輪読会に参加しました。しかし、それは単なる英語の勉強とは全く異なるものでした。その先生は、2つの異なるタイプの聖書の英語訳を用いて解説してくださいました。その先生が用いていたものは、原点に忠実な逐語訳版『新欽定訳（NKJV）』とわかりやすさを重視した意訳版『新国際訳（NIV）』の2つでした。もちろん両方とも現代英語なのですが、高校生なりに、新欽定訳の格調高い英語とわかりやすい新国際訳の違いに感動し、英語の奥深さと表現の豊かさに魅了されたことを覚えております。その先生が輪読会で強調していたのは、聖書の訳を比較することで、両方の良さがわかるということ、そして、そのことによって、何が真実であるかを見極めることができる、ということでした。

本学の「キリスト教と文化研究所」の所員として携われるきっかけをいただき、私もあの頃の先生の教えを思いだし、初心にかえり、新たな歩みをスタートできればと思っております。

（写真は卒業式におけるゼミ生との一コマ）

盧 柱亨（理工学部）
Joo-Hyong Noh

理工学部の盧 柱亨（の じゅひょん）と申します。韓国ソウル出身であり、大学院留学のため来日してからあっという間に30年が経ちました。身寄りのない異国での留学生活においては、大学在学中、兵役に行った時に新兵教育部隊の教会の入り口に書かれていたピリピ人への手紙4章6節「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。」の御言葉に守られてきました。小さいこと一つにも感謝の気持ちを忘れず祈りながら日々を送っております。私の専門分野は電子材料工学であり、半導体デバイスにさまざまな表面処理を施すことで、新たな機能を持たせる研究に従事してきました。

近年、スマートフォンやIoTなど、よりコンパクトでシームレスな技術が求められる中で、さまざまな材料から最適な素材を組み合わせ、最適な表面処理を施すことは欠かせない技術であり、最先端の半導体製造技術までにも大きく貢献していきたく思います。2023年に開設された表面工学コースに加わっており、学術的な知識や技術はもちろんのこと、自ら社会の様々な課題を見つけて取り組む姿勢と伝統を受け継ぎ、世界で活躍する研究者、エンジニアの養成により大きな役割を担いたいと思います。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL：045－786－7873（研究所直通・月～金9：30～17：00）
FAX：045－786－7806（研究所直通・24時間受付）
発行者：内藤　幹子
Director：Mikiko Naito